妖女のように・蠍たち

倉橋由美

倉橋由美子全作品

4

新潮社版

倉橋由美子全作品4
一九七六年一月一五日印刷
一九七六年一月二〇日発行
著者倉橋由美子
発行者佐藤亮一
発行所株式会社新潮社
〒162 東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)二六六一五一一一
編集部(〇三)二六六一五四一一
振替東京四-八〇八
二光印刷 新宿加藤製本
定価九五〇円

© Yumiko Kurahashi
Printed in Japan 1976
〈第四回配本〉

乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします

倉橋由美子全作品4 目次

蠍たち 5
愛の陰画 39
迷宮 55
恋人同士 95
パッション 105
死刑執行人 137
犬と少年 151
夢のなかの街 159
宇宙人 185
妖女のように 209
作品ノート4 251

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

倉橋由美子全作品4

蠍たち

(i)この記録は、T地方裁判所の依頼により、目下公判中の尊属殺人事件の被告人Lに面接してその談話を筆記したものである。面接に先だち簡単な視診、内診をおこなったが、当人は二十歳の女子として正常な発育状態にあり、婦人科的症状は全然みいだせなかった。

(ii)被面接者の略歴　L・M。二十歳。未婚。C炭礦社長故M氏の長女。もと全学連中央執行委員。現在T大学文学部フランス文学科に在籍。

(iii)われわれは最初Ravonal Interviewをおこなう予定であったが、被面接者はこれを強硬に拒否し、終始きわめて明晰かつ快活な態度で口述した。口述は十月十日午後一時から四時にわたっておこなわれ、いったんテープレコーダーに収録し、これにもとづいてT大学医学部助手Y・Tが原稿を作成した。

(iv)なお、同事件のいま一人の被告人K（Lの二卵性双生児の弟）は面接を拒絶し、目下手記を執筆中である。Lの面接記録およびKの手記は両人の精神鑑定書作成のための原資料として利用される。

T大学医学部助教授F・K

この夏おこったことをすっかり話すのですか？　それを書きとめて、精神鑑定書を作成して裁判所へお出しになるというわけですか？　たぶん、精神分裂病の症状でもみつけて、わたしを無罪釈放、病院行きにしてくださるおつもりね。それとも、わたしのなかから現代の苦悩みたいなものをピンセットで拾いあげて、告発の身ぶりでもなさるのかしら？　髪をきちんとなでつけて眼鏡をかけていらっしゃるところから判断すると、先生は標準型のヒューマニストなんですね。まだお若くてわたしより一ダースくらいしか年をおとりになってはいないわ。Kはどうしていますか？　書いているでしょう？　わたしのカルテをつくるよりKの小説をお読みになるほうがずっとおもしろいのに……じゃ、始めます。赤豚のことから話しましょうか。赤豚って、S氏のことですわ。七月のある埃っぽい午後のこ

と、赤豚から電話があったのです。これからわたしたちの家を訪問したいということだったので、わたしはさっそくKをせきたてておくさんを庭の礼拝堂に監禁しました。三年ほどまえからおくさんは物置を改造して祭壇らしいものをこしらえ、自分で考えだした神さまを拝んでいたのです。このおくさん――わたしたちの母のことですよ、信心をして勢よくふとりだしたときからわたしたちはそう呼んでいるんです、だって、本人もそれが気にいってるし、いまさらお母さんだなんて、おかしくて呼べやしませんわ。もっとも、Kとわたしのあいだでは、ばばあなんです。まるで、悪霊でもたらふく喰ってふとっちゃったとしかおもえないほどふとったばばあですわ。

まもなく頭の尖った白いスポーツカーに乗って赤豚がやってきました。「お母さんはお留守ですか?」というので、「ええ、あいにく」と答えながら、S氏の、これまた肥満しきったからだから、表皮を剝ぐようにして上衣をぬがせてやりました。Kがいまにもふきだしそうなほど謹厳な顔をしてあらわれて、「ついさっき監禁したところです、最近頭が少々おかしくなって人畜に危害を加えるおそれがありますから」と説明しますと、「いやあ、ははは」と赤豚は笑って、「こう暑いとだれだって頭も狂いますよ」といいました。じつに暑い日でした、それに西陽のあたる応接間でした。足の裏や眼のなかや窓枠まで汗をかきそうな暑さで、S氏は使役犬みたいに舌を出してあえぎながら、わたしをかれの秘書に雇いたいという話をきりだしたのです。かれはわたしたちの死んだ父の大学時代の後輩だそうで、仕事の面では父から少からず庇護と援助をうけていたという理由によって、今度はわたしたちのお役に立ちたいというのでした。S氏は大きい出版社の社長です。といっても、わたしたちの父が生前財界で占めていた地位とは比較になりません。わたしたちは、ブルジョアという野蛮な名で呼ばれる一族に、かつては属していたんです。S氏のほうは寒村出身のすこぶる健康な金持で、わたしたちが保持している精神の貴族性なんかとは縁のない人物だったといえますね。背はわたしより低く、酒とゴルフで赤くやけた顔をハンカチで撫でまわしながら、わたしたちのばばあに関する古い話をしたがり、そのとき、ばばあのことをマリコさんと呼ぶのでした。Kとわたしはテーブルの下でむこうずねを蹴りあって笑いをこらえていました。この肥満した紳士は、まるで自分とマリコという少女との恋物語でも語っているようなぐあいでしたけれど、そのとき、裏庭の礼拝堂でそのマリコの唸り声がしました。なにか家畜でも飼っ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

ているのかと赤豚がたずね、Kとわたしは口をそろえて、「ええ、豚のようなものを」と答えました。赤豚は、明日からでも会社にいらっしゃいというと、お土産のメロンをおいて帰りました。メロンをぺろりと食べてから、聖なる用途に使用されている例の物置をのぞいてみましたら、ばばあは壁に貼りつけた殉難図を掻きむしりながら悶絶寸前でした。わたしは彼女の眼に溜っているおしっこみたいな涙を拭いてやり、Kと協力して彼女をもとの部屋に運びこみました。というのは、このとほうもない肉の塊は、もう自力で移動することが困難だったのです。ほんとに、二〇〇ポンドはあったろうとおもいます。わたしたちも汗をかきましたが、ぶよぶよした荷物のほうも、とけはじめた冷凍鯨みたいに汗だらけでした。赤豚が訪ねてきた話をしますと、気持のわるい尊大さをとりもどして鼻で笑いました。「Sさんがおくさんのことをマリコさんと呼んで美人だったといっていましたよ」とKが話してやりましたが、当人はふんといい、眼を細めました。肉の砂漠に埋没してステンレスの包丁みたいに光っている眼。もう、どこをみてるのかもわからない。これはいい徴候じゃありません。近所では、このおくさんのことを気が狂っているらしいといいあっていました。防犯協会のおじさんなんか、わたしの家を顎でしめしてから、自分の耳のあたりに指で渦巻を描いてみせるんです。でも、おくさんがほんとに発狂していたかどうかは先生にだっておわかりになりませんわ。たしかなことは、おくさんをみていると意識の容器にひびがはいって、こちらが発狂しそうになるということです。わたしはKとよくこんなふうに議論したものです、ばばあの意識はどこにあるのかしら？　頭の隅に堅いクルミ状になって残っているのか、それとも莫大な重量の肉全体にいきわたってるのかしら？　いや、たぶん意識とはあの肉そのものなんだろうとKはいっていました。

　そのおなじ夕方、わたしが井の頭公園のプールでひと泳ぎして帰ってきたとき、近所の周旋屋のおくさんが、女子学生をひとり連れてきていました、下の部屋を借りにきたようすでした。ばばあは胸の大平原をはだけたまま、そこに流れるいく筋もの汗を拭きもせずにそのおくさんをみつめていました。この光景をみただけでも、とうとうばばあが発狂したのだとおもって顔中に笑いがひろがりそうでした。

「あなたはさっき妙なことをおっしゃったわね」とばばあが鋭い声でいいました。

「あら、なにかお気にさわることでも申しあげましたかし

ら？」と周旋屋のおくさんはすっかりうろたえました。
「いいましたよ。あなたはアパートといったよ、アパートとね。もうお忘れかい？」
「きょう、アパートのお話いたしましたかしら？」
「そう、そういえば正しい。でもあなたはきのうみえたときアパートといいましたよ、そのときは黙っていてあげましたけれどね。気をつけてくださいよ、女専まででたあなたがそんなもののいいかたをするなんて、みっともないざんすよ」
という調子でしたが、じつはもう毎度のことなんです。周旋屋のおくさんが侮蔑の卵をのみこんだ蛇みたいに身をかたくしているのをしりめに、ばばあはいまや相好を崩して、女子学生相手に部屋代や敷金のことを話しあっていました。金の話になると、ばばあは学術調査団の帰国報告よりも正確明晰になるんです。ただしそれはしばしば唐突におむつの替えかただとか、ガスのメーターがまわらないようにする方法だとかの議論へと迷いこんで、忘れたころにまたもとの主題へと帰っていくので、おくさんと女子学生は何度も腰をうかして頭をさげるのですけれど、そのときにはばばあは横をむいて知らん顔で、腹話術の要領でなにやらふしぎな歌を口ずさんでいます。きっと讃美歌のつもりでしょう。客が玄関からでたとたんにばばあは聞えよがしにいいました。「あの学生さんはみこみのある人間だよ、畳のヘリを踏まなかったからね。それにひきかえ周旋屋のおくさんはいい年をしてなっちゃいないよ」
自分の部屋にあがって窓からのぞいてみると、周旋屋のおくさんと女子学生とがさかんにいいあっていました、おくさんはあんな無気味な女と暮すことはないと説得していたにちがいありません。でも、翌日、その女子学生は古ぼけたオルガンといっしょに引越してきました。
わたしとKの共同の部屋へ挨拶にやってきたとき、彼女は部屋いちめんに散乱した本や雑誌のうえに半分裸でねそべっているわたしたちをみてぎょっとしたようでしたが、「驚くことはないわ、はいってきてあなたもわたしたちみたいにするといいわ」と勧めてやり、足で紙屑や雑誌をかきよせて坐る場所をつくってやりました。この部屋について説明しておきましょうか？　この部屋はKとわたしが生まれたときからいっしょに暮している部屋で、そのなかはちょうど躁鬱病患者の頭のなかみたいになっていました、相当な量のライブラリーがあって、それを手あたり次第に一週間も読みちらしていると、やがて本の山がそれ自身の重みで崩れおちてくるし、わたしたちは競争で本とがらく

たと紙屑で部屋を装飾して、この混乱にやさしい愛着を感じていたんです。足の裏や肘をよごしてごきぶりみたいに紙と埃のあいだに棲んでKと猥談その他のことをするのはとても愉しいものですわ。夏のことでわたしのほうはたいがいスリップ一枚で、Kのほうはパンツ一枚でいたもんですから、冷たい本のうえにころがっているといい気持でした。

女子学生に名前をきくと、ユカリだといいました。「でも正確にいえばユカリじゃないの、むしろ eucaly ときこえるように発音しなきゃいけないの。そこが微妙なところよ」という説明でした。Kとわたしはユカリの指導をうけて何十回も「ユカリ」の発音練習をやってみましたけれど、うまくいきませんでした。彼女は失望したようすで、「あんたたち、そろって音痴の傾向があるわね」といい、それから気をとりなおすと、わたしたちのことを学生夫婦かとたずねました。

「ばばあがいったんだな」とKが笑いだしながらいうと、ユカリは「あのおくさんのこと？　それはおくさんからきいたのよ」

「あれがあたしたちのママなのよ、よかったらあんたもばばあとよぶといいわ」

「じゃああんたたち兄妹ってわけね」

「双児の姉弟よ、珍しいでしょう？」

ユカリはそれをきくとにわかにKに関心をしめしはじめ、とくにKが若い女子学生のまえで裸でいることにたいして、ふたことみこと、PTA副会長のような調子で非難を放ってから自分の部屋へおりていったものです。わたしは、「ユカリはあんたに少からずまいったらしいわ」とKに指摘してやり、彼女がきょうあすのうちにでも深刻な口実をもうけてその生ゴムみたいなヴァージンをKに与えたがっていることは確実だといいますと、Kも心から同感したので、わたしたちは声をあげてよろこびあったほどでした。

秘書の件ですか？　そうですわ、S氏、つまり赤豚が訪ねてきた翌日から、わたしは秘書としてかれの出版社へ出勤しました。仕事は暇で、お金は特別たくさんくれるというので、わるくはないとおもったのです、なによりもわたしは働くということがきらいなんですから。それにしても女秘書という仕事は退屈なものでした。書類を扱うのはわたしの役目じゃないんです、それは古くからいるトンボの複眼みたいな男の秘書の仕事でしたけれど、わたしにもりっぱな部屋があてがわれました。苔色の床のうえにスティールの大きな事務机と書類戸棚があって、部屋の隅にはガ

ス湯沸器やサイドボードも備えつけてありました。わたしのおもな仕事は、インターフォンでS氏と連絡して、作家その他の面会人たちを社長室に通しては送りだし、どうでもいい書信の類をS氏にかわって整理したり電話をかけたり、ときどきアイスコーヒーやジンフィズをつくって社長室にもっていくことでした。それでもなお暇なときにはこの社から出ている小説を読んだり爪を磨いたりしていました。三日めの午後、S氏が田村町のレストランでフランス人と昼食をしたとき、わたしもいっしょに行きました。わたしが多少フランス語をしゃべるからです。こうした生活にはじきに慣れました。

ある日、退屈して鏡のまえで顔を突きだしていますと、赤豚がタバコをくわえてはいってきました。マティニの作りかたを教えてあげようというので、かれはサイドボードからドライ・ジンやフレンチ・ベルモットの瓶をとりだしてシェーカーを振りました。わたしは鏡のまえでマティニをちょっとなめて首をすくめました。赤豚が近づいてきて鏡のなかのわたしに頬をすりよせましたが、これはまさに「美女と赤豚」という構図でした、ところが、わたしが口を閉じたまま笑うと——ね、こんなふうに——肉の好きな猛獣に似てくるんです。たとえばこうやってちょっとからだをよじったりすると、育ちのいいブルジョア娘のなかからふいに猫族特有の高貴でしなやかな荒々しさがあらわれるでしょ？　ひとはだれでも、わたしの卵形の顔や、デリケートな手や、優雅なからだつきをみれば、わたしがかつて選ばれた家族の一員だったことを疑いませんわ。でもほんとうに高貴な血は、そのなかに馴しがたい猛獣性をふくんでいるものなんです。そのとき、S氏もいいました。

「きみは変っている、妙にワイルドなところがあるね」

「あたしはとつぜん都会のまんなかに連れだされた野蛮人なんです」

「人喰族の末裔かね」

「人喰族の娘よ」

「秘書にはむかないかもしれないね。客はみんなきみをみてからはいってくると、わたしにむかってにやにや笑うんだ。とにかくきみは異様にめだっているらしいよ」

それから赤豚は、急にまじめな顔になりました、わたしを力いっぱい締めつけてキスしようという気をおこしたんです。なにもそんなに周章狼狽の態で下手くそにキスすることはないのにとおもいながらわたしが口をそらしてしまったので、赤豚もなにごともおこらなかったような顔をして、「どうだね、今夜いっしょに食事をしないか」とささ

やきました。「ご馳走ならいまがいいわ、ちょうどいまおなかがぺこぺこなの」とわたしはいいました。赤豚があんなことをしたので、とたんにおなかがへったみたいでした。そのことを説明すると赤豚は当惑顔で、これから作家のG氏と会う約束があるといいました。「でも三十分ですましてこよう。きみの今日の仕事はもう終りだ、運転手を帰して車のなかで待っていてくれてもいい」

わたしは化粧をなおして外にでました。ごく最近まで、Kとわたしは父が家屋敷や有価証券といっしょに遺した五三年型のぼろシボレーを乗りまわしていたものです。その車は国会へデモにいったとき乗り捨てておいたら、学生たちがひっくりかえして火をつけてしまいました。赤豚の車はクーラーつきの堂々とした伯爵夫人みたいなベンツでした。わたしは運転手を帰すと車を走らせてみました。車って、身ぶるいするほど好きなんです。窓をぴったりしめて、右往左往する人間のあいだを走りながら、ゴスペルソングを歌ったり、強姦されるときの絶叫をやってみたり、とっておきの猥褻なことを大声でしゃべったりできるのがすごく気にいってるの、たとえばKと淫したいとか……このことばはあとで説明しますわ。

S氏のことをおもいだしたときにはもう一時間近くたっていました。高速道路を走ってからもとのビルのまえに帰ってみると、赤豚は追剝にあった紳士みたいにじだんだ踏んでいるところでした。かれはわたしの横に乗りこんできて、社長と父親を半分ずつ混合した調子でわたしを叱ったので、「叱られるのは大嫌いよ」といってやりました。

Qと知りあったのはその六本木のレストランでのことでした。赤豚とわたしがテーブルについてオールドゥーヴルを待っていますと、女子学生らしい女の子を連れた男の子がはいってきて、「やあ、いたいた」と赤豚に手をあげたのです。赤豚は露骨に渋い顔をしました。災厄というべきでしょうね。わたしにむかって、「息子だよ」といいました。平凡な金持の息子で、自分ではプレイボーイだとおもっているけれど、じつは愚直で魅力のない青年でしたし、その女友だちのほうもおなじでした。Qはわたしが S氏の新しい秘書だと知ると気安く話しかけてきました。

「いまどうしてる？　大学は？」

「遊んでるわ」とわたしは答えました。Qはわかったふりをしてうなずき、大学へいかない理由をさらに知りたがるのでした。

「おまえ、知らないのか？　Lさんと弟のKくんといえば去年まで全学連の有名な指導者だったじゃないか」と赤豚

がいうと、Qは「関係ねえや」と肩をすくめ、女子学生のほうは目にみえて萎縮したようでした。
「でもいいわね、秘書のお仕事って」と彼女はいいました。
「あたしもバイトをするなら秘書をやってみたいわ」
「いや、なかなか気の疲れる仕事ですよ」と赤豚がいい、はははと笑いをつけたして、「ちょっと失礼」とトイレにたちました。Qがわたしに顔を近づけていいました。
「おやじの秘書なら気が疲れるよ、おやじは女にかけては手がはやいからな」
それにたいしてわたしが、社長や重役ともなればみんなそうだし、わたしはそれ以上に手がはやいのだといってやりますと、Qは愚かしい歯列をみせて大笑いするのでした。
数日後にQから電話がかかって、わたしは御同伴席のある極端に暗い喫茶室でかれと会いました。あの女子学生にも飽きたのでわたしに乗りかえることにしたというのでした。暗くてよくはみえませんでしたけれど、わたしのすぐ横にみみずくのように光る眼と顔があって、数秒後にはわたしの顔におおいかぶさってきました。すばやく逃げると、Qは不機嫌に黙りこんでいましたが、「その後おやじにはなにかされたかい？」ときくので、「されないわ、ときどきアンプラッセしようとするけど、そのたびにふきだしそうになるの」
「きみがそういうなら安心だ」
「ところが安心するのは早いわ。この秋かれはヨーロッパへ行くでしょ、そのときあたしを連れて行くんだって」
Qは舌と指を同時に鳴らして憤懣やるかたなしという様子でしたので、「でも怒ることはないのよ、あなたもこの夏休みに卒論を書きあげたら連れてってくださるそうだから」
それからQはわたしをバアに誘って、そこで自分の家族のことを語りはじめました。わたしにはなによりも興味のもてない話でした。男の子って、求婚の序奏に家庭とりわけ母のモティーフをかなでることが好きなんですね。その次に将来の家庭の設計をやってみせ、そこに母のかわりに未来の妻をいれてみる、そうして娘の手を握りしめるというわけね。でもわたしは他人の家庭の話をきかされただけでも充分すぎるほど退屈していました。Qは自分の家族のことを語り終えると、わたしの家族に会いたいので一度わたしの家を訪問するつもりだといいました。
「それはだめ」とわたしはいいました。
「なぜ？」
「家ではKと二人で妙な女を飼ってるの。ヨークシャーみ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb